

琉球大学学術リポジトリ

孝経, 其他諸書物綴

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション : 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 宮良當整 (筆写) , 2009/6/5 16:49 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6217

大正八年己未十月合併

孝經其他諸書物綴

宮良當整

孝經

二十四孝行之錄

鴈之諸書

經典神註

孝女口說

魚水之解

花木養方

力ナリ鳥之說

三味說之由来

以呂波字多
拾玉智惠海

兵士充心懸
雲打水之机

(登川院書上作爲とあり
九月十日記す)

以呂波字多の光子
一兵多 (用紙工之机)
一雲打水之机 (用紙於八枚)
あり九月十日記す

孝

二十四孝行之第一

爲之記書

經典

孝女口說

魚水之明

花不卷心方

少鳥之愛

三木說之

以爲

拾遺

卷

卷

卷

卷

卷

卷

卷

孝經

松茂氏
當親

孝經

仲尼問居曾子侍坐子曰參先王有
至德要道以順天下民用和睦上下
無怨汝知之乎
曾子辟席曰參
不敏何足以知之
子曰夫孝德
之本也教之所由生
復坐吾語
汝身體髮膚受之父母不敢毀傷孝
之始也立身行道揚名後世以顯父

母孝之終也夫孝始于事親中于事
君終于立身 愛親者不敢惡于
人敬親者不敢慢于人愛敬盡于事
親而德教加于百姓刑于四海益天
子之孝 在上不驕高而不危制
節謹度滿而不溢高不危所以長守
貴滿而不溢所以長守富富貴不離
其身然後能保其社稷而和其民人

蓋諸侯之孝 非先王之法服不
敢服非先王之法言不敢道非先王
之德行不敢行是故非法不言非道
不行口無擇言身無擇行言滿天下
無口過行滿天下無怨惡三者備矣
然後能守其宗廟益卿大夫之孝也
資于事父以事母而愛同資于
事父以事君而敬同故母取其愛而

君取其敬兼之者父也故以孝事之
則忠以敬事長則順忠順不失以事
其上然後能保其爵祿而守其祭祀
蓋士之孝也 用天之道因地之
利謹身節用以養父母此庶人之孝
也 故自天子以下至于庶人孝
無始終而忌不及者未之有也

右經一章

子曰君子之教以孝也非家至而日
見之也教以孝所以敬天下之為人
父者教以悌所以敬天下之為人兄
者教以臣所以敬天下之為人君者
詩云愷悌君子民之父母非至德其
孰能順民如此其大者乎

右傳之首章釋至德以順天下

子曰教民親愛莫善于孝教民禮順

莫善于悌。後風易然。莫善于樂安。三
治民。莫善于禮。禮者敬而已矣。
故敬其父則子悅。敬其兄則弟悅。敬
其君則臣悅。敬一人而千萬人悅。所
敬者寡而悅者衆。此之謂要道。

右傳之二章釋要道

曾子曰：甚哉孝之大也。子曰：夫孝，天
之經，地之義，民之行。天地之經而民

是則之，則天之明，因地之義，以順天
下。是以其教不肅而成，其政不嚴而
治。

右傳之三章蓋釋以順天下

子曰：昔者明王之以孝治天下也，不
敢遺小國之臣，而況于公侯伯子男
乎？故得萬國之歡心，以事其先王。
治國者不敢侮于寡，而況于士

民乎故得百姓之歡心以事其先君
治家者不敢失于臣妾而況于
妻子乎故得人之歡心以事其親
夫然故生則親安之祭則鬼享之
是以天下和乎災言不生禍亂不作
故明王之以孝治天下如此詩云有
覺德行四國頌之

右傳之四章釋民用和睦亦無怨

曾子曰敢問聖人之德其無以加于
孝乎 子曰天地之性人為貴人

之行莫大于孝

孝莫大于嚴父

嚴父莫大于配天則周公其人也

昔者周公郊祀后稷以配天宗祀
文王于明堂以配上帝是以四海之
內各以其職來助祭夫聖人之德又
何以加于孝乎 故親生之跡下

以養父母曰嚴聖人因嚴以敬敬以
親以教愛聖人之教不肅而成其政
不嚴而治其所囚者本也

右傳之五章釋孝德之本

子曰父子之道天生君臣之義也父
母生之續莫大焉君臣臨之厚莫重
焉不愛其親而愛他人者謂之悖德
不敬其親而敬他人者謂之悖禮

右傳之六章釋教之由所生

子曰孝子之事親居則致其敬養則
致其樂病則致其憂喪則致其哀祭
則致其嚴五者備矣然後能事親
事親者居上不驕為下不亂在醜
不爭居上而驕則亡為下而亂則刑
在醜而爭則兵三者不除雖日用三
性之養猶為不孝也

右傳之七章釋如子事親及不敢與侮
子曰五刑之屬三千而罪莫大乎不
孝 要君者無上非聖人者無法
非孝者無親此大亂之道也

右傳之八章

子曰君子專上進思盡忠退思補過
將順其美匡救其不義故上下能相親
詩曰心乎愛矣遐不謂矣中心藏之

何日忘之

右傳之九章釋中于事君

子曰昔者明王事父孝故事天明事
母孝故事地察長幼順故上下治天
地明察神明彰矣故雖天子必有尊
也言有父也必有先也言有兄也宗
廟致敬不忘親也修身慎行恐辱先
也宗廟致敬鬼神著矣孝悌之至通

于神明光于四海無所不通詩云自西自東自北無思不服

右傳之十章釋天子之孝

子曰君子之事親孝故忠可移于君事兄悌故順可移于長居家理故治可移于官是以行成于內而名立于後世矣

右傳之十一章釋立身揚名及士之孝

子曰閨門之內具禮矣乎嚴父嚴兄妻子臣妾猶百姓徒役也

右傳之十二章

曾子曰若夫慈愛恭敬安親揚名參聞命矣敢問從父之令可謂孝乎

子曰是何言與是何言與昔者天子有爭臣五人雖無道不失其國大夫有爭臣三人雖無道不失其家士

有爭友則身不離于令若茲有爭子
則身不陷于不義故當不義則子不
可以弗爭于父臣不可以弗爭于君
故當不義則爭之從父之令又焉得
為孝乎

右傳之十三章

子曰孝子之喪親哭不依禮無容言
不文服義不安聞樂不樂食旨不耳

此哀戚之情

三日而食教民無

以死傷生毀不滅性此聖人之政

喪不過三年示民有終為之棺槨
衣衾而舉之陳其蓋篋而哀感之擗
踊哭泣哀以送之卜其宅兆而安厝
之為之宗廟以鬼享之春秋祭祀以
時思之 三事變敬死事哀感生
民之本盡矣死生之義備矣孝子之

事親終矣
孝經終

二十四章孝行之錄

二十四章孝行之錄

太舜

隊之新イロハ春象ナリ

嗣堯シヨウ登寶位トク

漢漢文帝

仁孝臨天下トク

漢庭事賢母トク

紛之マシ託トク草禽ナリ

孝感動天心トク

魏之冠百王トク

湯藥必先嘗トク

曾參

母指纒方嚙

負薪歸未晚

閔子騫

閔氏首賢良

首前留母在

劄子

見心痛不禁

骨肉至情深

何曾怨晚娘

二子免風霜

老親思鹿乳
若高聲不語

江草

負母逃危難
哀告俱獲免

子路

負米借耳肯

身掛褐衣
山中帶箭歸

窮途賊犯頻
痛力以供親

寧辭百里遠

身榮親已歿

董永

葬父貧方兄
織絹償債主

陸績

孝弟皆天性
袖中懷綠橘

猶念舊劬勞

天姥陌上
孝感盡知名

八間六歲兒
遺母報乳哺

唐夫人

孝敬崔家婦
此恩以無報

吳猛

夏夜無帷帳
恣集膏血飽

王祥

乳姑夜盥梳
願得子孫如

蚊多不敢揮
免使入親圍

繼母人間有
至今河水上

郭巨

貧乏恩供給

黃金人所賜

揚香

深山逢白額

一祥天下無

一片臥水摸

埋兒願母存

光線照寒門

努力搏腥風

父子供無恙

朱壽昌

七歲生離母

一朝相見面

虎豨婁

到縣未旬日

願將身伐死

身脫創口中

參商五十年

喜氣動皇天

椿庭疾遇深

北望啓憂心

黃香

冬月温衾煖

兒童知子職

姜詩

舍側井泉出

子能知事母

老萊子

夏炎天扇枕涼

汗古一黃香

一朝雙鯉魚

婦更孝於姑

戲舞學嬌癡

雙親開口笑

蔡順

黑椹奉親闈

赤眉知孝順

王裒

慈母怕聞雷

春風動綠衣

喜色滿庭闈

啼飢淚滿衣

牛米贈君歸

米魂宿夜臺

阿香時一震

丁蘭

刻木為父母
寄言諸子姪

孟

泪滴朔風寒
須臾春笋出

到墓遠千回

形容在日身
聞早孝其親

簫之笋數笋
天意報平安

山谷

貴顯聞天下
親自瀉溺器

平生孝事親
不用婢妾人

二十四章孝行之錄終

鴈之讚書

松茂氏

宮良記

山公
齊祖
...

夫鴈ハ仁義ノ禽ニモ或ハ二十或ハ三十皆相
讓テ行ヲ列チ尊者ハ前ニ在リ卑者後
ニ在リ預メ次序ヲ正レ而シテ後ニ飛ブ者十
リ雄其雌ヲ失ヒ雌其雄ヲ失フ如キハ死
ニ至ル迄フタヒ配セス此ニ因テ此禽ハ仁義
禮智信之五常ヲ備ヘリ此禽空中ニ於
テ伴ヲ失フ時ハ盡ク哀鳴ハ此乃チ仁ナリ
一タビ雌雄ヲ失フトキハ再ビ配セス是乃チ
義也次序ニ依テ列ヲナレ飛ブトキハ前

後ヲ越ズ是乃千禮ナリ預メ寒暑ノ至
ヲ知テ江南ニ來リ自ラ能ク其難ヲ避レ
是乃千智ナリ每年秋ハ南冬ハ北其時
ニ背テ來往ス是乃千信ナリ如斯五常
ヲ備ヘタル者ナリ

夫誠ハ善ノ一也
而亦善ノ本也
夫誠ハ善ノ一也
而亦善ノ本也

經典

補註

常四時周復始循環不窮乃天道流行不易之常理

徒スフヤカリ陽ニ居錫シ

陽有衆萬物之功剛之正直ナリ

仁禮陽トシ徒トス

遂乘金德生マナリ

循ハレタガフ環ハメニル九序也

乾陽 健

元

春

木

仁

肝

酸

父子

亨

復

火

禮

心

苦

長幼

常四象

時四

行五

土人

信五

脾五

甘五

朋友

不易流行

利

秋

金

義

肺

辛

君臣

貞

冬

水

智

腎

鹹

夫婦

坤地母 順

陰有發生載萬物之功柔順ノ

利貞遂乘土德成就ナリ

欽撰

天文地理以季以伏犧以河圖ヲ出テ曆易水波ハトク
常之愛之羞有之ト其源一也所禮曆ハ是性命ハ
理小治ハ國人之安ト政ト務ハ也ハ至要也故小黃帝
河圖ト文ト天文ト地理ト歲時ハの遷移ハ考ハ水原ト說ト
文ト記ハ白ハ印ハ月ト別ハ晦朔ハ同ハ月ト別ハ曆ハ治テ制ト
帝ハ舜ハ猶ハ城ハ衛ハ也ハ立ハ也ハ七ハ政ト齊ハ一ハ曆ト治ハ民ト教ト
必ハ兼ハ世ト也ハ道ト也ハ當ハ人ト用ハ集ハ事ト也ハ備ハ記ハ生ハ志ハ和ハ漢ハ
歲ハ分ハりハ也ハ之ト也ハ聖ハ人ト曆ハ治ハ也ハ水ハ波ハ也ハ其ハ真ハ首ハ

造りて射る陽精と清く因ふ凝り終る薄くして地生る
言依て造の多少薄くくこの運送小由る是と人射て
之の造別射と潤と血なり古砂は因也金石髓骨
車水は毛髪なり常小陰陽は二氣と飲食は其射と
養と潤造と流水は溪澗川河は造と運して海に
陽小入る是二便の道造なり人倫の色小は因と
生る物此の二と一亦天地一体は理あり其射は
何處ぞ天地則空也陰陽とて体は成陰陽と
育養陰陽とて魂魄とて是是自然の理なり
強陰の形なる射と陽強を火と生射は火小潤
火の射小潤を養とて交とついで心火と成天極是
陰陽善化は極と包名て大極善渾化て其既判
小及二義とて是は家とて小形り五行とて小本
善物とて小生階條施事消長の道人莫測故小
乾道は成坤道は成二氣交感善物は生る射別
小は谷視海の等十百千と善小とて齊とてはとる
成化元年癸未臘月中和日

田中藤兵衛漢百撰集

五倫の義

父子有親

父子は同じ父慈子孝なりて親しむべき

天下に所^{ユル}在^{アラ}人の事と云ふ分きて其倫を云其倫を其教と謂て
子教とも云り其内父母子と生るる天地の萬物と生るる
道理を出て父子の倫を定むる也親其教と云て孝慈とい
ふも孝は父に對して母は母に對してあるなり海は父海
は母の事と云はざるなり必敬戒し居り若し自ら其孝を
懈して子と不親し居りて是れ是れ禽獸の子と云はれりて
憐れむべきは此孝なるを去る食はば食ひ飲はば飲むるは友

悉其德小者以共化之受て其性不遠是美也育者
なり各其兩に能得治て地道安寧ありん

夫婦有別

夫婦は同に各定偶なりて是れ

天下陰陽の道は夫婦の陰陽和合して万物を生ずる
夫婦和合して子孫を生ずるは夫人の理なりて婦は陰陽の
倡はる陽の先を以て陰は倡ひ陰は起る陽は起る是
自然の理也之理よりて夫婦の倫と定むる可きは是に剛
正を法く申す徳と云ふ婦は倡ひ候へば宜く柔く静
らるるは次婦は貞靜なり一節小靜あり徳と云ふ是も徳

即寵也小者事ありて是れ但共管要といふ夫婦和合
睦は内事也外は差別ありて中言を以て男は外と治の
女は内と治の男は内なるの道は正女は妻の事と云ふ
是外は差別ありて是れを以て故小聖人夫婦の同小治は
別の一字と云ふ易は法之定は所指夫婦小別也と云一向は
承夫婦の授受なり。有別は配偶と云ふ配射也合也
正也偶也合也射也夫婦の正れく小定て礼は別と云
有別と夫婦の間は親易故小常小者夫婦を以て是
別と云ふ是より云は神に義有各有命別是別といふなり

長幼有序

長幼の間格は長幼の次序なり又義

父母の事するは孝の道なり父を尊ぶるは孝の道なり母を尊ぶるは孝の道なり父を敬ぶるは孝の道なり母を敬ぶるは孝の道なり父を養ふるは孝の道なり母を養ふるは孝の道なり父を事するは孝の道なり母を事するは孝の道なり父を愛するは孝の道なり母を愛するは孝の道なり父を慕ふるは孝の道なり母を慕ふるは孝の道なり父を敬ぶるは孝の道なり母を敬ぶるは孝の道なり父を養ふるは孝の道なり母を養ふるは孝の道なり父を事するは孝の道なり母を事するは孝の道なり父を愛するは孝の道なり母を愛するは孝の道なり父を慕ふるは孝の道なり母を慕ふるは孝の道なり

少長を知るは孝の道なり長を敬ぶるは孝の道なり幼を愛するは孝の道なり長幼を知るは孝の道なり長幼を敬ぶるは孝の道なり長幼を愛するは孝の道なり長幼を知るは孝の道なり長幼を敬ぶるは孝の道なり長幼を愛するは孝の道なり長幼を知るは孝の道なり長幼を敬ぶるは孝の道なり長幼を愛するは孝の道なり長幼を知るは孝の道なり長幼を敬ぶるは孝の道なり長幼を愛するは孝の道なり

朋友有信

朋友の同教信なり又義

朋友の交わりは信の道なり朋友を信するは信の道なり朋友を敬ぶるは信の道なり朋友を愛するは信の道なり朋友を慕ふるは信の道なり

元

亨

利

貞

時 春

元東小屬
起四二月日

夏

亨南小屬
起四三月日

秋

利西小屬
起七九月日

冬

貞北小屬
起十一十二月日

生物之始一也... 元の位にして...

亨小於元... 人の性小於元... 是衆美以長なり

生物之通一也... 元の位にして...

人の性小於元... 是衆美以合なり

生物之遊一也... 元の位にして...

人の性小於元... 是衆美以和と濟なり

生物之成一也... 元の位にして...

人の性小於元... 是衆事以幹とありなり

五事

一曰鏡滄水也... 既生別聲... 看食ては言故

二曰言既揚火也... 言能く視る故

三曰視教水也... 既視て後聽く故

四曰聽收金也... 思去原を心通して去故

五曰思猶古... 思猶古也

鏡曰恭貌... 我者之恭齊莊中正有貌即有恭之德

言曰從言有夢... 從順理成章有言即有從之德

視之德... 云明未施て神有德也... 聽之德... 云聽知未感て虛去何同

思之德... 云睿凡恭從明徳之理皆有道... 其義微也云事之徳之有徳必有道

其心懐なく憂と云ふをさうも本石小ひしう徳と仁の
心は潤川て人とのく物と傷み常小道理の感て心
思電するんらると仁を感し。○徳和也柔也物やわら
かるて徳和と云うんくしとみむと慈電と云其の不遠
惻隱之心仁を徳也也惻隱之心非人也惻隱と云心と
よむ惻傷の功なり徳の深也心小生に可む
天地の性と云徳也天地にありて徳と云人東漢で生る
時に生る物も小は徳と云けて生るもの其氣は心
備へ生る人より養とのる人其物れ中の空りて

淡かり又人の行ひの中りて孝道より大なる養とのる
又人具足するもの心は金徳分て仁義徳智と云
仁の二小徳よりあり仁を徳と云并電に教ふと云
孝道は才一系物と云いし也又天地は生成する氣
形なり一理心と云る也賦は人を行は考すると云
中間生る也天地は功と人小らこれ賦就と云る也小
二天地を並びて其化育となす故小天地は二夕と云
陰は圓と象天是の方象地也天小同而行九解之音
六六日なり天小同而象是なり人小亦取共善怒らる故

陰必雲肺と為亂肝の風情の互時を言ひて
天地と相参る也 仁は射則臨に用ふり

義

判断裁割則宜之理なり其意を義也

夫小至て一秋小至て利と名づく陰氣は肅敬の道理
肅敬は草木の意と為一実と信じて万物が一定の
事也其道理と人にて義と為故小裁判断則其夜
賊とて裁割する依小道理と宜と云わらんわ電燈は小
至は此の如く義人のそれを一毛と云ふ一毫の一定
一云と云ふ一毫事は此の生處三時生死生三時死故

約法にして少も其篇と違ひざる也義と云ふ一判は
裁也又法也制の節也裁は節也又裁は也判は裁也
四字は節法と為と云ふ事と云ふ事理は宜小
理と云ふ小意は事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
宜也道徳之心は義之端也是非人非人也彼は小不若の
事の有と和とと思は道徳也人の不若と云て是と云ふは
悪ふり 義は休養也用ふり

禮

恭敬持節則敬は禮也其意を恭遜

恭はとやうと云 形小なりと云
敬はとやうと云 小なりと云

夫小至て一歳小至て有と名づく陽氣は長養の意

道理の長短と云ふ物に長しき事ありて短しき事ありて道理と云ふは是れ禮と云ふ故に恭敬辭儀を
敬以候物と辭儀と儀と云ふは其若し其若しと云ふは
衣冠平しく威儀礼らんと云ふは是れ禮と云ふは是れ
己と後り其外より行ふ何事にも儀を禮と云ふは
自ら自由を言ふは是れ儀と云ふは是れ禮と云ふは是れ
ある事と云ふは禮と云ふは是れ恭敬と云ふは是れ
禮と云ふは是れ儀と云ふは是れ禮と云ふは是れ恭敬と云ふは是れ
礼と云ふは是れ儀と云ふは是れ禮と云ふは是れ恭敬と云ふは是れ
礼と云ふは是れ儀と云ふは是れ禮と云ふは是れ恭敬と云ふは是れ

智

分別是非別別と理なり其教は是非

天下をてい冬小ありて貞と云ふは陽氣は凶を是る道理なり
凶を是る事小は極小なり云はくは穴ありて故に是れ物
同を是る事なり其道理は人をして智と云ふは是れ是非と

分別多しは人非是也トラシの大明の如く其心は清く澄み
 氣言はるは信て其見方の如く定る事ありされ各は氣
 化に保く信するは書は氣づくと信しく常は靜の因
 根に入て物と管をもちんむき物小向ふ時あるは是也
 逆するは信と不信と。分別はるは是也と分別て
 是也い非也非也此とよると是也人智と信也
 是也人非人也善と信ては若くは悪と信ては
 悪と信ては信是也の心は用なり

信

中央別業有る理なり其意なる信

正不正ては信ありて定る事有り古也信ふは
 古用は事ありされは信するに古用ありて仁義禮智
 あり信ふは信を但仁義禮智は外は信は信理なるは
 あり仁義禮智なる其実ある道理なる事とありて
 信は信は信は氷は冷ふ火の煖は信は信は信は君は
 事は父母に事ありて其外ありて人交ふ事ありて
 其心は實なりて用は私と不信は外は信は事ありて信は
 道理の一篇と守り信は信は信は信は信は。實は
 公道と行ふ實は吾一は信の道と信は信は信は信は

卑しきしつ時に出でて、其徳体明小通達し顯明せし
其徳曰海と光し輝し美事に以て通云とあり。○人月ふ
りて父子親愛し道なり外小出て君臣忠義し道也
是而偏の内父子君臣は道別て行ふ處に大徳は理を
忠信し君小事する云際と云く是惟分明小極め云て
隨正と云く君若くは臣小事し主の如く小事することあり君臣行ひ
せし道小闇け失ふありは正と云くは道と稱し寒ひて全
ては後陳と云ふと云く是より君若くは臣の如く行ひ
し君と臣相ひて扶助しきで風氣せしむるあり其若

くあり亦小及んば人にとはありあり君と一と云ふは道と云ふ
匡一と云ひて一と云て一と云と止むるあり其外小形も人にと
はありとあり。○君を道あり月は徳しきとも因ひて却て
之より徳せらるる國と云ふは徳小伏しきとも徳じ是忠
義なり。○天人の道昭也と云毎に孝と云て夫也明孝あり
天道自ら明あり美事感徳ふたきなりありと云ふ
偈句感云意波より後陳と云是破妙なりは道徳あり
華の響も形小影らるることし神明彰き鬼神著し
神明道一は毎と光と云ふ事なる感徳の理あり

五志天地小亦さうと明きる時、氣藏感してなりと
如くあり、^{イラン}彰そ、神明の造化は功用あれ、形はありと
なるをさし、いり、其福祐と降して、何時妖愛を、
之り。○神明と云、造化は功用と指て、之り造化は天地
形為する、之り、功用は是、^{イラン}見ま、亦、^{イラン}はそ、^{イラン}中、^{イラン}未、^{イラン}是、^{イラン}は
日、性、月、未、^{イラン}の、^{イラン}生、^{イラン}し、^{イラン}長、^{イラン}ま、^{イラン}は、^{イラン}類、^{イラン}あり。○天地小亦さうと
上、^{イラン}如、^{イラン}く、^{イラン}の、^{イラン}時、^{イラン}の、^{イラン}神、^{イラン}明、^{イラン}洋、^{イラン}く、^{イラン}て、^{イラン}其、^{イラン}願、^{イラン}小、^{イラン}さ、^{イラン}如、^{イラン}く、^{イラン}ま、^{イラン}は、^{イラン}在、^{イラン}京、^{イラン}
上、^{イラン}如、^{イラン}く、^{イラン}も、^{イラン}さ、^{イラン}ん、^{イラン}や、^{イラン}威、^{イラン}社、^{イラン}を、^{イラン}如、^{イラン}く、^{イラン}ら、^{イラン}る、^{イラン}ま、^{イラン}と、^{イラン}あり、^{イラン}洋、^{イラン}と、^{イラン}流、^{イラン}動、^{イラン}
氣、^{イラン}清、^{イラン}れ、^{イラン}兒、^{イラン}と、^{イラン}り、^{イラン}水、^{イラン}れ、^{イラン}流、^{イラン}み、^{イラン}ら、^{イラン}る、^{イラン}意、^{イラン}あり。○人身陰陽は

二氣陽と云鬼と云陰と云魄と云死時陰陽詔教して
魄池小帰を其子孫穢と云く、教と云く、て奉祀と云、
其魂鬼を、^{イラン}格、^{イラン}て、^{イラン}其、^{イラン}祀、^{イラン}と、^{イラン}ら、^{イラン}る、^{イラン}理、^{イラン}あり。○鬼神と陰、
陽二氣、^{イラン}正、^{イラン}伸、^{イラン}性、^{イラン}を、^{イラン}る、^{イラン}ま、^{イラン}の、^{イラン}と、^{イラン}指、^{イラン}て、^{イラン}云、^{イラン}神、^{イラン}陽、^{イラン}は、^{イラン}正、^{イラン}氣、^{イラン}は、^{イラン}
伸、^{イラン}る、^{イラン}亦、^{イラン}あり、^{イラン}鬼、^{イラン}陰、^{イラン}の、^{イラン}正、^{イラン}氣、^{イラン}屈、^{イラン}する、^{イラン}亦、^{イラン}あり、^{イラン}人、^{イラン}正、^{イラン}する、^{イラン}時、^{イラン}其、^{イラン}
鬼、^{イラン}氣、^{イラン}と、^{イラン}鬼、^{イラン}氣、^{イラン}と、^{イラン}鬼、^{イラン}と、^{イラン}之、^{イラン}り。○天、^{イラン}陽、^{イラン}也、^{イラン}正、^{イラン}健、^{イラン}と、^{イラン}正、^{イラン}位、^{イラン}
父、^{イラン}は、^{イラン}道、^{イラン}あり、^{イラン}亦、^{イラン}り、^{イラン}地、^{イラン}陰、^{イラン}なり、^{イラン}正、^{イラン}順、^{イラン}と、^{イラン}正、^{イラン}位、^{イラン}を、^{イラン}母、^{イラン}あり、^{イラン}亦、^{イラン}り、^{イラン}
天地と云く、て乾坤と云、^{イラン}天地、^{イラン}形、^{イラン}體、^{イラン}あり、^{イラン}乾、^{イラン}坤、^{イラン}と、^{イラン}正、^{イラン}位、^{イラン}
たり、^{イラン}乾、^{イラン}は、^{イラン}健、^{イラン}なり、^{イラン}て、^{イラン}息、^{イラン}の、^{イラン}揚、^{イラン}は、^{イラン}物、^{イラン}資、^{イラン}て、^{イラン}以、^{イラン}降、^{イラン}る、^{イラン}亦、^{イラン}れ、^{イラン}志、^{イラン}を、^{イラン}坤、^{イラン}の、

順中、帝らの招き物降して生るるものあり是乃
天地は天地する由介してあり是物も父母するものあり
氣と天小東形と地小賦、藐然の乃混合して同なりて
中、位を子の道なり乾陽坤陰、道天地は氣而同小
寒、人物は資して生るるものあり故小天地は寒、言の
難かりと乾、健坤、順是天地は性なりは氣、物、人、物
皆て、性、多るものあり故小天地は、性、多るものあり、
是とと、寒、まれの別乾、父坤、母混沌之中、虚、多るものあり、
見、る、る、人物、天地、同、小、生、生、其、資、て、生、る、る、ものあり

皆天地は、物、なり、全體、不、偏、高、生、る、は、殊、あり、故、小、其、性、
於、て、分、り、明、暗、れ、る、惟、人、也、其、形、氣、は、心、と、皆、て、是、心、
を、意、り、て、性、命、は、全體、小、通、る、こと、は、り、生、生、は、中、小、於、て、
同、類、を、資、し、て、生、る、ものあり、故、小、同胞、言、い、別、其、道、と、是、る、こと、
示、也、是、中、の、如、く、惟、之、は、同胞、の、人、故、小、天下、一、家、一、中、國、と、
一、人、と、一、同、を、言、ふ、物、は、別、の、形、氣、は、偏、と、皆、て、性、命、は、
一、中、小、通、る、こと、は、り、故、小、我、と、類、と、同、を、言、て、是、る、こと、
人、の、貴、小、亦、其、體、性、は、る、る、中、と、は、り、故、小、是、亦、也、と、是、
天地、は、は、は、け、て、是、る、中、と、は、り、故、小、吾、則、其、道、と、是、る、こと、
天地、は、は、は、け、て、是、る、中、と、は、り、故、小、吾、則、其、道、と、是、る、こと、

肝

肝と膽は脈と新出風水

目肝小屬目和黒白とある也

春仁小屬

肝竅と目小開くあり

眉肝小屬木氣と重る也

心

心腸と脈所公君とあり

舌心小屬火と重る也

夏禮小

心竅と舌小開くあり

髮心小屬火と重る也

五臟脾

脾胃は脈と滲去と新出

口脾小屬土和刺殺味とある也

中秋信小

脾竅と口小開くあり

肺

肺と腸と脈滲去と新出

鼻肺小屬鼻和刺者鼻とある也

秋義小

肺竅と鼻小開くあり

毛肺小屬金氣と重る也

腎

腎膀胱と脈空と出る也

耳腎小屬耳和刺者音とある也

冬象小

腎竅と耳小開くあり

顔腎小屬水と重る也

書法式

一筆法此書に上根は千字と書し中根は百字と書し
下は音字と多ふところを強ふと一字と書くなり
是も千字と書ふ處も一とあり

一取扱は白真の言ごとく行いぬらふとく筆はて
ごとく去るはれは三休真の言ごとく行いぬ
同ごとく筆はてはとせとあり

一視やうう書いよとあり視やうは書力とて指
る一書もこれに候は候し包は候し書は候し

書圓親其書振之在藏の唐模也今此人云唐模と云ふに
懐素又二宋元筆名の筆に少らざる相創して其法
失ふに愛法と云ひける實の唐模と云ふ昔も二五法筆法
計一筆の法に中一之數小を之と云ふ

一或人書法海を初めは國に書と云ふ事云國親を以て
ふせりとも書と云ふ事云初りて云ふ月と云ふ事ありて
初りて云ふ事ありては初りて云ふ初りて云ふ事ありて
筆法に遠く書法に筆と云ふ事云三可と云ふ事云初りて
は云ふ書法に初りて云ふ事云初りて云ふ事云初りて

一此國に筆法と云ふに唐模に初後と云ふ事云初りては國
初りて漢人の初りて云ふ事云初りて云ふ事云初りては漢
人云書と云ふ事云初りて云ふ事云初りて云ふ事云初りて

一此は人が邦の二白人の書と觀て曰ふ事云二五法筆法に中
女の書と云ふ事云初りて云ふ事云初りて云ふ事云初りて
は國に書と云ふ事云初りて云ふ事云初りて云ふ事云初りて

一隋書云代乃同隋書と云ふ事云初りて云ふ事云初りては
初りて漢隸に今の隋書に初りて云ふ事云初りて云ふ事云
書云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

漢代の中絶やして王次仲右法と謂う條條やして
又漢小後漢小或して蔡邕点画と指して永寧の八法と
似て隸として隸の書法とは附小定むとて程邈の隸書
今或る隸の秦小始之とも漢小をて蔡邕小始の故小漢隸
と名指書と号し解法指して秦漢とわたり隸は古今の
別として武法と邈の隸の真を故小指書と示真とい
ふ書とふなり

一 晏始蔡白谷と他の秦に王次仲なり古今法書苑に云
小篆教して八分生を八分取て隸書出と史谷は字體

勢は八分小篆の如く八分と云ふ

一行書に晏始蔡白谷の書と他の後漢に顔川劉涪界
たり曠の書に依り替て簡易小從て亦と書流は
亦と一行書と云

一章仲の書に云漢に黃令史游が他の亦なり亦と云に之は
文字と書かたりて子づふと云ふ書る文字とくくたりと
ひきに文字ばりたりは法と用と應りかて向ふ人
ひ合し書なり

一 漢字と如く法に書換りたりは史游小後と云ふ

張るる字とする處は以て元と云ふなりて書すしる也

但し字と云ふは造りては指す事なりて後する處

一字と書換へるは後秘傳書換ひる内は六根と云ふ

なるはそありは玉るは六根を字とせする處

悉くありあり其後まゝ明とんとしる

壹門觀之始

光緒十年甲申九月九日寫詞也

魚水之解

麥茂姓

當宗

池のあはれ波三つうりてうらま出る
祖山是也程たまの詩心満頭白髪
児孫成守りとひり富士乃草山と
をん仁者樂心智者樂水の本心
をまれば玉のぬきをひきしも光てまれ
うらまの玉の拍子その赤人う田子
乃浦よ赤いそり思はれ白髪は富士の

言收に雲のぬりけいのかこぢもひそ
まひていふ汁清心まじしふまゝ
造りてよにまにまのいふくはに
よるよのいふく。剛明の菊城屯
白樂天の竹城屯。源溪の蓮池
屯。明道乃皇池城先てむり
かと深やこふありとうや。れこれあひ

けをく、流ひまらふとふあり。ふせ
ふけくい乃友の朝のいふまゝ。ふる
らん岩の池水

真水の解



夏の江子娘ふまゝ。水かくさふしこ
刺ふあひに皇池城後市。くもく
金真水はれてふ。けい。竹西水

およよ。津ぬるふとかり。まこの池を渡る
いとよそそ。ま。ゆるゆると。流るよし
ふりふり。と。あ。かり。人。欲。つ。り。て。天。理
流。行。の。時。よ。及。て。水。は。と。流。る。ふ。と。く
よ。あ。は。て。ふ。ま。ん。と。あ。も。り。あ。ま。ゆ。す
止。水。で。覧。と。む。う。人。は。い。あ。れ。は。人。妻。又
見。る。魚。老。と。と。壯。年。と。知。り。た。も。

海。を。そ。め。く。う。ち。む。り。て。い。と。や。れ
け。ふ。遊。泳。と。も。あ。り。と。あ。い。の。り。言。見
枉。者。の。冠。衣。む。い。人。童。子。の。七。人。と。も
ひ。ひ。て。春。景。目。の。長。閑。向。り。あ。ま。い
あ。ら。ん。と。と。ま。あ。り。理。は。は。く。と
あ。ま。い。と。あ。ま。い。と。あ。ま。い。と。あ。ま。い。と
あ。ま。い。と。あ。ま。い。と。あ。ま。い。と。あ。ま。い。と

礼本表方之書

松源氏

高宗



Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly impressions of characters.

芝菜養方

村山親方傳文

一 古板板七月廿五用之在六和古と小使

一 古板後 又七八日初日(板) 粉家(古) 与

一 古板後九月末十月初以霜降

一 古板後(古)

一 古板之時(古) 古板(古) 古板(古)

一 古板(古) 古板(古) 古板(古)

一 古板(古) 古板(古) 古板(古)

入水し... 又古水し... 右邊の
下極事

一 種留りの指日復るを早し

一 二月之月未く月七古乾して見合小使

一 碗天水に碗を交する宜し

一 四月を八月迄とす一月を

一 十月十二月兩天六二日留りて宜し

其長と括濃く有る

一 右之月七朝日留りて宜し

一 正月七日迄の流有る古回し

一 夏と落冬と日之留りて宜し

一 日時七古乾して天水を下す

附古乾の時七古水白し

一 鶴持班お射の時湯煮候に池にお更

冷し富候湯煮候白布を摺落し

お除し

一 芍薬 之 根 豆 之 汁 飯 之 汁 等 汁 油 粉
 赤 少 古 角 形 之 根 用 之 宜 也 方 以 有 之 是
 有 枝 物 用 之 以 有 之 中 之 宜 也 宜 也
 一 平 日 古 芍 薬 之 赤 汁 与 古 漬 乾 一 等 度
 之 根 用 之 宜 也 赤 汁 之 中 也 右 同 也

桃 表 方

一 春 夏 之 以 至 五 月 之 末 六 月 之 末 水 用 之 事
 一 九 十 月 之 以 至 五 月 之 末 之 度 之 小 便 之 中 一

水 二 斗 氣 亦 更 右 同 也

梅 之 表 方

一 乾 葉 之 以 後 枝 之 日 恰 好 見 合 之 四 月 末 後
 葉 之 中 之 以 至 五 月 之 末 切 取 尤 黃 其 根 枝 也
 五 月 之 中 之 以 至 六 月 之 末 之 中 也 乾 葉 之 中 也
 一 右 同 也

一 古 梅 枝 之 中 之 以 至 肥 者 古 小 細 砂 之 中 混 漬
 安 小 水 混 漬 之 中 好 也 好 也 好 也

但古板用之如法是也

一 格卷末叶时与一印一印右七小使水
字方给与神、格并筆

一 二月末迄六日迄七夜次六日迄
用之致次与一之實也

一 三月清明之日與舉出共时合次方
只可也

一 小卷末之夜應有之格格与一之實也

お遺後次方

一 望卷末之早速し方方一也

一 一印一印十月一二月五小使水字方

給与月、二日及計在月四月、九月迄

并況け水字方給与七八夜有在月合

濕物也方一也

一 格格留之夜十月、九月迄一也

一 月重下之夜四季大影一也

一 瓜皮是翅蟻小虫くさすは採食に丸凍り
附行きさるるは梅くさ白く

思ふ梅板

一 補ひ古茶 一 梅古茶

但し程成る多分古梅板小便交るは
合儀皮へ古中十日計おそくは青
二夜之下も小便交らるわけはた
日和見合平梅高梅付は事

梅付之時

一 牛皮是焼細株は添へはと迄側へ老
添へ底へは砂身汁入付は是氷と連らぬ

一 梅付方十月宜し

一 今中一用板面天之時小便交る水直

即ち迄思度汁用は雪月以後はみ

の時時へ右之法で用は是

一 油如き汁入へては白し宜し

一 小便も不可宜らば其子と付て見れば
冷床之時に見合わけるも其の宜い此後
能く再産下候

用候六枚

大正元年十月既月廿百首雲御醫長

田嶋親とて清布持くも其家九り也

松原

宮内親とて

高宗

此の増書田嶋親とてその方とて記す

記

一 カナリ鳥ノ儀雌雄附候テヨリ廿日ニ蛋子産
生ス大スウ三候テヨリ十四日ニ生始出来候テ
十日ニ月開ク亦廿日メ二母子相下カリ生リテ
四日計リ六女モノ男モノ呼リ候テ雌雄分別ニ
成リ候

附喰物ノ儀粟マツジシ胡麻菜種子並

青毛類

一 天國香朝春ハ秋ヨリ冬ハ花大ク白甚シクヤレハ

米ノ汁小便並キヤウナイ又魚洗汁宜シ

一 阿蘭陀菖蒲俗ニ向主花ト花形ハテシレヤグノ様

内ノ六薄黄丸外ノ六赤黄金十二月ヨリ萌出四

五月頃八葉持候得ハ中心出来必花開ク六月ヨリ

クヨリ十二月末頃ヨリ翠出候也 クヤレ天國香同断

右自分心得トシテ大畧書記置候也 申日 十二月

二 法説之由來

史ニ依據云々此神也天地人々わささ

なりむし黃帝の神也為始也之乃國ハ

天子也ささ下此法が方ハ地心のもろかり

之乃法ハ人々此ともなり大法を君と

中法ハ法と也小法ハ民と也男法者濁り

多ク淨極くとも此也く人々君とむりてハ

中法とも是君とともハれまふともいん

君此所德也中德は前如谷川ノ水也
君試いさあしよち民を教訓して善端發見
にたしめて善徳執りて改成治士は職に二
女は音信をきくはとわら流と細也
こふはは月未をくく一系事一若者
とるは民百姓の道なり是れおん人んは
人も信とてこのときたれ中上とて道
陰陽の光おと水化生一右乃は下とて

いふ人毎人生變て流い波もなと是徳
高の徳也且天地おることや九百九お學
天道と人事ときわらうもの利女信音信
言の音お通もこのこと一也く天地万物を
我の親わかみんか一也とて人たうく天地
のくもこのこと一也物亦亦なることきいあち
天地の徳とて是信と得ては徳は
徳也の徳とて信の事なり禽獸も群也

中ノ居異ニ廻リて居る事多ク一尤非
かりしよしと云ふ事多ク聖人清化され法
事多ク初めりか一邪しくゆゑかよふ事多
只己が心と沈靜して善性持て喜ひしもの
市中の邪をば拂ひ妖怪と除けしりき
ありてうし一憂慮されし事多き事多
心那一氣と成りかゝる事多し法を國と
天とと平ふ事多し又いふ事多し

此の先男信君政事只向し一
安徳の法もわろし又信を信士とせし
之己が法もわろし建ひの國を亂
れし女信の國百姓を苦しめしあり
彼を法と村側よりしきとひりて
之の法もわろし法士の範一政し
わろし身と沈し一と云ふ事多
破乳是く心しる事多し

信君の
事

附
あふらと沈と弾くて篤く知失とふ
奇とあふらと又信とふこれとき
流とあふらと弾くとのとる是と

歌謡事

性情書ふべき事

琴三味線

沈静篤實可歌謡

浮躁淺露彈道

只今の三味線とて沈静とて是れをけりて言ふも
沈静とて沈静とて沈静とて沈静とて沈静とて沈静とて
沈静とて沈静とて沈静とて沈静とて沈静とて沈静とて

元禄十一年乙酉正月五日泊村外宿

下宿の事を書き下す也

用紙

松紙

高宗



受心六年石月

齊宣公以呂濟字多

白の市井のよきものゝ心はさかたに
りふらふは海にわたりて人々を
けしき人ふいふは海にわたりて
いふは海にわたりて人々を
かりて我れは海にわたりて
るらそと人々をわたりて我れは
少くも我れは海にわたりて

た人いふにといふも善人善くいふるなりとて
昔よりつとむるれ其業とていふて世の人
おとあつて心ゆきまふにまればいふたていふに
たふいふるも種百子並のまらあつたれ世に
後世にたふつていふれ流し我ありたふとくといふれ
いふと始りあつてもいふいふいふつとあつ
昔とあつていふいふにあつと勅の流したつりつ

ふ里とあつといふいふるんといふいふに
滅るるよりたつといふといふれとあつていふ
くふとあつて世法いふいふるんといふいふ
風俗をいふいふいふいふいふといふいふ
いふいふといふいふいふいふいふいふ
いふいふといふいふいふいふいふいふ
いふいふといふいふいふいふいふいふ
いふいふといふいふいふいふいふいふ

明王のころのつれなき文がたゞしく行はれる也
と云ふ世のたゞの事なれども世にまじりて世に
君と事とあるらむにまじりて世にまじりて世に
世にまじりて世にまじりて世にまじりて世に
目ふらぬ事なれども世にまじりて世にまじりて世に
たゞの事なれども世にまじりて世にまじりて世に
世にまじりて世にまじりて世にまじりて世に

之をまじりて世にまじりて世にまじりて世に
唐土の事なれども世にまじりて世にまじりて世に
世にまじりて世にまじりて世にまじりて世に
世にまじりて世にまじりて世にまじりて世に
世にまじりて世にまじりて世にまじりて世に

大甲夜等庵主呂波河詠

今世に生れぬやもめでたしに思ふらんを
あふいそふ人もあふ事なり百にそく討破れ
りれまゝはむめりも我らもあはれ
にほふもくもむ唯まゝの心もつと
ほふはなれぬ心もつとむめりもあはれ
いそふもくもむ唯まゝの心もつと
あふいそふ人もあふ事なり百にそく討破れ

昔年九月廿七日
男色と好く情欲を
流すは元義如く
今も好く

書札と松

新編藤原家系書に於て松島松島松島
思ゆぬ書札と云ふ松島松島松島松島
由らふらふと云ふ松島松島松島松島
之列に後 大守公任集流源節忠実と
其の一人日列在角公らと云ふ松島松島
其花舟舟と云ふ松島松島松島松島

若くは真武とて女を勝る男色を
 かくの天にたゞるる天籟もや宮に可
 成るる画もまゝとて先づいふ
 及ゆき文の秋曲関子の餘風を
 言を子路の思ひの常に幸作の文
 ぬんく唐詩の道と飲ひまを唐の
 らんと移る林葉のこころの月夜
 ぬんくて待て候りて詠と詠と減
 うつらうとていふならは天籟の
 ちやうと唐詩の道と飲ひまを唐の
 ぬんく唐詩の道と飲ひまを唐の
 らんと移る林葉のこころの月夜
 ぬんくて待て候りて詠と詠と減
 うつらうとていふならは天籟の
 ちやうと唐詩の道と飲ひまを唐の
 ぬんく唐詩の道と飲ひまを唐の
 らんと移る林葉のこころの月夜
 ぬんくて待て候りて詠と詠と減
 うつらうとていふならは天籟の
 ちやうと唐詩の道と飲ひまを唐の
 ぬんく唐詩の道と飲ひまを唐の
 らんと移る林葉のこころの月夜

此の書は清書と書かざるが故に

と書くに

我はたつてに介人沖の石火と志すべし

文月六日

栢田市郎

誓書之辭

之書公人修徳いふ一書も其書を
中へかへい我忠志を信りて

自ら進み進み又徳府にあり
内に入ると志すも永仁とあり其書の
情が深く飛神好まことり此
書の源義経が武蔵坊弁慶の情源
の物語りなり命と命川志合致
と書と雖も後新田武敏公治
日一の史り人を義由明は

伊是行の大なるに生別友の喜深く
伊は拙く軍にやれと油を道ま
或るん様もくしん一書かはやま

せりあし ちちふと

情あまなるあはれなる心と後世の
なする
た作たりちちとくたは思ふく波を疑
くくし方友好勝なりま書の秘密の

ままに心を感かたはれんとすのりくふ
或する者のおまやうくすてまの
目とあひはひ一書かた情と希なり
ねんは空門坊と中三すゆとね
ましとまあふくくは痛りく思ひは
命もあひりまねく一書かた彼も
人々くく心と油ととくく河とた

あつてはさういふことゝ思ふに昔思案の地は
我々の地はなほいふに地入のりか
とて心抱と相成りしを今も別れ
々作らるるり一車をも人目と思ふ事
ありし方中にも思ふ事又一小地連と
成りてはさういふに内村と平と長谷川と
地とをく地と一色地と一色地と

無言地りてはさういふに内村と平と長谷川と
地とをく地と一色地と一色地と
さういふに内村と平と長谷川と
地とをく地と一色地と一色地と
さういふに内村と平と長谷川と
地とをく地と一色地と一色地と
さういふに内村と平と長谷川と
地とをく地と一色地と一色地と

新やと早計ききい花身持国市御計
かふとみまのりし心をふくに歩解て耳杯
こころ計きりの巻南より月より今を度と
入河小地なる中に依依は流物なる其
人々をたしともや約急なる所持て
いかに暇と念に流る其海に流心か解
流る松田とらまへて候はれ涙を流す

流るの流るりなる流るる人々をたし
ふの流ると流て八日と月と流るる
流るるなる川の流るる掛ふ流る流る
流るる内なる目と受流るる流る入
り流るる流る流るの流るる流るる
流るるりし流るる流るる流るる
流る流るる流るる流るる流るる
流る流るる流るる流るる流るる

其時其様田の事押計し其
計の中いゝ事少くもなれ
今宵志と人れ城の事共し東道と
いふ事返

いふ事返し様と其様は世の事
知れず計の
事少くもいふ事返し様と
いふ事返し様と

いふ事返し様と其様は世の事
知れず計の
事少くもいふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と
いふ事返し様と

らるるは毎山をまわつて人と雲に
耳はさくま母の心はゆるぎなく
あつたはるる風はゆるぎなく
らるるは毎山をまわつて人と雲に
一書は紙にそへ今も紙にそへて
らるるは毎山をまわつて人と雲に

あつたはるる風はゆるぎなく
らるるは毎山をまわつて人と雲に
一書は紙にそへ今も紙にそへて
らるるは毎山をまわつて人と雲に
あつたはるる風はゆるぎなく
らるるは毎山をまわつて人と雲に
一書は紙にそへ今も紙にそへて
らるるは毎山をまわつて人と雲に

予のこころを憐れむとて
しるしを口に出さずして
新なる

外戚といはれし者も
己思ふに多し
掃蕩後世に
あはれむ人

是も人におかぬを
おぼしむる事
忠貞の例
田舎の事

長年於道に之六月夢橋湯林氏志流高秀不終字如也の句とし

智慧海叙

凡天下の事物小即て推て知らぬ
乃理あり推て知らざる自然の理あり
通じざり遠ざと求め早きより高き
に登るは是松美のふつなれとて
柯と執く柯は伐る其後後を執る
少高乃柯を別とて其脱して視
聲を其聲を其とて公を好む
知事を見ぬ小益を其問は換る

- 一 漱きく指辛く煮き指し飯炊きやうし
- 一 挽竹やいふそくゆるふそく 子進指しやう
- 一 煮白飯に系よりやうし
- 一 中束おれぬ木あやまといふ
- 一 竹の角は生のさくらやもろとわがまの指
たやうし
- 一 若き煮きめ枝中とせと煮きけし指しやうのり
- 一 五郎の蛇のあらと即見と法
- 一 お道とらめ昔の年がう飯と法

借換門

- 一 金更のりーやうし
- 一 蛇の具は生れけらるるどく海も文字と
頭と
- 一 枝中麻作すじの木を洗ぶやうし
- 一 人新海の眼すり先りをあや
- 一 小口虎下は殺或焼小をけり
- 一 石の破るるやうし
- 一 上の文字をすゆは

- 一 走り時息のきりぬ法
 - 一 刀脇指の持ちこたえ方
 - 一 躰なすに指先をさうのめり
 - 一 晒帷子此端をひき合す
 - 一 洗人平巻をす
 - 一 雷れぬぬ札のめり
 - 一 盗と取す法
 - 一 井へ地の為るるとは所井ノ座
- さうさうめり

- 一 万巻の起り物まきつぬ法
- 一 襪の飛足の被り方
- 一 茶碗と平碗の取
- 一 書物よ小に書
- 一 竹と班
- 一 針のけしき
- 一 寒月
- 一 饑と除く方
- 一 小字と大字

一 外見を起り教

一 磁器類（磁器）の用法

一 板の書（板）の文法と法（文法と法）

一 筋の眼（筋）の用法（用法）

一 墨の油（墨）の用法（用法）

一 墨の墨乃（墨）の用法（用法）

一 衣（衣）の用法（用法）

一 師（師）の用法（用法）

一 夏（夏）の用法（用法）

一 秘傳（秘傳）の用法（用法）

（注）

一 小便（小便）の用法（用法）

一 魚（魚）の用法（用法）

一 燈（燈）の用法（用法）

一 湯（湯）の用法（用法）

一 書物（書物）の用法（用法）

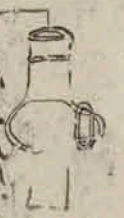
一 書物（書物）の用法（用法）

冷し地粉のりなると丸或は依りて福甚きなりと云ふ所
里し丸をもち存せし初まきなりは法はあり

竹花を胴に入れたる



一は胴の長さ
と云ふおれせ



は長さのりなり

たかく幅と入る

ははらるせとく

はとく胴へ入る花生と成なり

風玉乃法 大さの製法

一為き相し研の形を地と振く腹は計りて

寒く如き宛あり等よりねを管でせしとす

へたせかへ金毛のりの上は魚へけま宛あり

自ららるを唱へ奏妙なり

福は法利 鷹なすり

一視の徳利は鷹入りなり中へを換のへりあり

車一のりしを主造他は奏せり大無徳利

へ二もつのかを金管一尺のりなり

自ららるもあく出らなり

嶮難の山七曲九折なり

一 波につぐくはしどくをく、こころいふと、
 獨りもたしやまふて飯と炊きやうのみ子
 一 山中の巾着かといへし米の道より福を分く、
 飯と炊きやうのみ子、
 傷をやすむり、
 切も、おをきせ、
 其より、
 一と如かり

潮より塩をく、
 飯と炊きやうのみ子

一 海に遊ぶ者か、
 飯と炊きやうのみ子、
 入ると、
 右の、
 りず、
 提灯、
 らく、

糸のいとまじり・やう小刺りの・そくまのさ

物いしこま志まのぬせ知しり

一本のちまおれぬ川流くそ尺ら魚一ぬと

おそ何ても本づもへ何の流兵ふの弄妙

なり

或人曰四角も本日勿き唐かあり是も他他者へは
七角は川へ流しこま志まのぬせ知しり
又曰四角も本四角も何ぞせよれり何ぞせよれり
答曰いこま系らなく何ぞせよれり

竹の筒花生を和花とて内かほぬぬりり

きりやりのゆ

一竹花生其和花とて内かほぬぬりり

え器あつとをへくわくぬさまをへぬれりいび

竹のゆくと思ふふとぬさまをへぬれりいび

へ入ぬぬぬさまをへぬれりいび

ぬさまをへぬれりいび

除よ筋つと何りいぬの通りを残さぬいび

いび

長なきぬ竹中をせまし通りぬりぬり

一杖息道より通しぬ竹の糸とぬせり

今に抄あぬえ乃方な信と強神よ来ぬぬ

日礼おきて自ら金平のまじりたるなりたは
此中おろりり虫生ずるひまらよんへんそ
おろり虫と云ふを金一

蛇の具おし進め方とてく誇るとし文字

よてし取らるる

一語をいれらるるさびくのなれ蛇の具の
中にせしめ誇りて誇るとし文字そと書蛇
の完とてつめ塞那とていへん一月ごり
よそ歌と換換とたへんるべし書方とあり

とすはまを末代とてありて、奇物の器と
あり

一 我中衣抱すり此もき誇りたるもの
一 帝位よえとてふ小かと四角よ削りえり
とてし 誇りやうやい 誇りやうは氣の業
と多くあつめあつめよまの業の業と誇
りては 藤とて後ひ一取とて氣の業と
馬とて如かりい 誇りと合へんるべし
湯と沸一い熱る湯の中へ本と入る

志ろく者心ればは小初うよわやにひをそ
 裁て物そ人浴い一日はよ浴へらちん
 と造るともたき分るあつさゆをためるが
 のこくしてゐる様とつらきとよますり付
 けたりはまためらるるそよひくそつ地の例
 生を多うものそ様をば
 人秋の服の服より走りてあさうむら胡粉
よまをたむらきとよまをたむらきとて服と新色す
 れば走りてあさうむら

小刀危丁ま飲或は焼西をけり
 一言道作の法流の業やあま解小刀危丁
 よまをたむらきとて服と新色す
きくへい鮮明とてあさうむら
 石の彼方とつて法
 一 熱石の熱のわれるとつては端の角と徒
 福りつがしとてとつてとて右田きうとて
 離るるあし一併石の熱はくくか或水
 塔布を破目小針ついで破る時とてまうと
 金一

石も文字とすゆかば

一石も文字とすへんとおろく煙管のやじと異に
すりも是をふて石も文字とすけいをもせくおろく
へ投入坐六十日とく後ら心へ入らぬ文字も
よほひひてしすりてもあつめり

走る時息のまじぬ法

一走らけ息のまじぬ法は走らぬとけり然
と呼びとあひ出するをいふ走りてし息の
まじぬかり勢八をうてし會て方程はし
刀振指指と子進とす法

一木物の指れとてわり根葉の實れ生るまじと

勢八へはむらりかきしとて根とけし根葉
まじりし根もくをなすなり根葉のゆき物
つば根の指れとてげもれり生るまじ
根葉のまじりて乾き方と一木もよき法
をよくこすり

鑿

鑿を以て胡麻をやるのみ

一胡麻と根葉を丸やくたの中へ投入
油少しとこけすの油入とて油少しを
かり胡麻を丸やくたの中へ投入の

久しく見理するも扱はるる可なり

寒月を氷としは是の凍りたるは

露の寒と生ゆふに侵して陸平一平六

粉より寒の身は是より余るる氷より凍りたる

鐵と保く事

一 大至重陶説い三通蒸て麻のよはと麻

ふ事ある一長浸一三通蒸て麻のよはと麻

時はとる一三平く擲て餅の如く丸く誰

よ入く初末より末はして蒸て末の冥の時に

餅より五回一以の意焼く餅より粉より

い熱と飽をと巻一三幼外の地

始一夜飽をと食すれは七の同飽

又七とそ飽を食すは早の飽す

たつとそ食すは二を飽す

るそ食すは二十四を飽す

のゴト一口湯は昔より麻の湯と餅

若者のよく食せんと二が冬蒸る

粉射て湯を煮りさほして腹を

食の寒のときして大便ありる

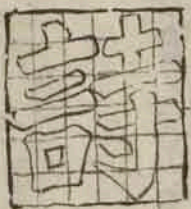
どく食の進まがしと寒より一言と

脚強顔多々しくしてせうすい 驚愕すりりありと
 王氏書法書よアハ人なり
 或人ほほのこしくしたるなりやまほほの如く顔をほほきて
 かーし言がー

小字と大字の字すし

一 夫字で切めきつたお極す押法あれとも日守の
 始めおれどー只巻盤系の刻むと文と
 字せむがーし遠ふりやー字は小字と一
 填廊うて堅根を系と刻むの極りの
 際り印の如くおれぬるすし 卷 巻盤

母の教をりしと子の小字と系の書法おれ
 の正し点畫あると云と分て後お極へるを
 かく文字と他れは字盤法おれし書と
 かーかくのとく筆くよ巻盤系と極て字盤
 せむおの大字としおれり大字と小字とすりし
 志のほの如くして筆よ系はほくはるなり
 海とてしおれり



あつてもくはやくよ系のなと六よと一よよの虫
よた字すれがまてよのやうに少くも廣く極く
て定むる割合せ替くむかへたよとよと一
すうもけい一はかり一

千字文のり散

一荊棘トクノ一障トク一草鳥クサトリノ一短トク章トク一藁トク本トク
右印束トクよ一て草履トク草鞋トクのつとめりゆりゆま
てとれぬりもけい一はかり道と歩りてもさす
目トク後器トク靴トク川トクゆやうのし

一乞トクきりよまらりていこふよゆゆのゆゆりゆゆり
けゆゆりよ地トク一はゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
よゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
く一ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



乞トクきりよまらりていこふよゆゆのゆゆりゆゆり

板トクよまらりていこふよゆゆのゆゆりゆゆり

一各の敷板トクを書きたり文字トクの交トク付トクの境トクと
指トクすすりつけ板トクを巻くふいぢりや
藁トク北トク白トクのしり指トクすすり

梅乃眼腫を十二時迄治

一卯酉●辰戌申寅●己亥未丑午子一

右の品以て知つては其のとく一時は治る
かゝる少い考へ見るとなり一

方よ 六九くは此れは七と
まよごりま九のり

是も油をわきと煮くわうたの

一 是の他（ちぢ）西後小即症を多くとし他は
治す掛ひら下一わらあは治す其の治す
指之他のよりさ唐さるとは紙をわく粘
付是の張付は下一聖日治と云ふは是も他

の治方一

是も是の治方と云ふやうに

一 是も是れ（れ）方と云ふてわりの治方
へ一と云く是れ一其まは是も一しては治す
草を後とくすべしと云ふ

右の治方は是れ付ては治すやうに

一 昔は一鳥（のり）骨一滑石一白（ちやう）石
各一（のり）石粉一して他の治方と云ふ
かひく固と一は治すは付ては治す
とわけて固と一右の粉と云ふは治す

其とて招へりて其の行方あるとの意に
諭してわがははふりて其の飲む酒はこれに
し

夜飯又酒の事いふは流れてなほ

二夜飯又酒の事いふは流れてなほ
其緒のより不交ふとあつて其意を
りやうあるおのれとあつてわがし
原あるなり

秘傳松茸白ひきの漬物の法

一松茸は釜煮するちやうどおひ中やうにわり又新塩漬の法あり

とまひらきしたの意であらうし一通り
よはれどもさ此ふならありとぬり
とくつく通りのしめしもの中て
既よりうけむれはとくぬい
ぬいつもし入用し時お目よ
かゝ煮物おやすりよ白ひ
がことしむさいん

其炭火かゝるはゆとゆ

一舟を登りて其の船の楫より日又照り
温りとるの舟をへた船よ炭火と

一 焼酎の味をいかにするにや
わらを碗砂（焼酎の味をいかにするにや）とすりこぎよ
うまけていかにしてあつらふと云ふはつづし

鳩米虫くいざらしやう

一 鳩の皮を鳩米自身にかけし虫づらにまじり
糠としよをわすれ後取り入ればふとまじり

汁の衣類よ虫くいざらしやう

一 汁の虫くいざらしやうは汁の虫くいざらしやう
しよをわすれ後取り入ればふとまじり
ふとまじりよをわすれ後取り入ればふとまじり

よりきこいそまのそり六は蒲団の敷置
十は川草此系といけるよ一蒲団の
るよ入置の虫くいざらしやう

髪とよくしえ澤の法

一 髪は黒くしえ澤の法は髪をぬぐりしはよみ澤の
と煮けしえ髪をぬぐりしはよみ澤の
どしよをぬぐりしはよみ澤の
に搦らに申すはよみ澤の

日おれ香色と知り法

一 日のおれ香色と知り法は日のおれ香色と知り法

一 此の巻の目よ大雪降なり
 一 此の巻の川よりは降かき古なる下も
 降なり

一 此の巻の川よりち小石降なり

日和と知多し

喜み物と長に死に秋をきこし

ふもあがりつてもあがり

年中日和の善悪を知らる



一年中の日和

れよーあー

ひあしとて考へ

知らへーけり

西に方より

よあかり日和

あり

